

こども通信

サクラの花とともに春が訪れました。今年のお花見は長く、たつぷりと楽しめましたね。

新年度も1か月がすぎ、新しい園や学校、学年などに慣れてきたころでしょう。疲れもたまってきたかも。

GWの長期休みを利用して、また体調を整えて下さい。

* *

天皇の交代に伴い、新しい元号「令和」が始まりました。名前が決まって1か月。まだなじみが少ないですが、次第に慣れてくることでしょう。

「平成」という時代くくりは日本独特のもの。西暦で表せば（その方が簡単だし、分かりやすいとも思いますが）20世紀から21世紀にかけての流れの中での一部分。でも日常生活の中で使い慣れているためか、「平

成」という時代が特別なものと感じられます。

当院の開院は平成2年（1990年）。その前年から準備をしていまして、医院は平成と共に始まったという歴史があります（でも、平成と共に終わってはいませんよ）。



平成の約30年間で、医院が生まれ、育ち、大きくなってきました。途中から病児保育も始め、職員数は30名以上の大所帯に。そして医師も小児科医2人の体制に。この地域の小児医療や子育て支援に大きな役割を担っています。

平成の最初に、こんなふうになるとは思っていませんでした。その時々で、まっすぐに、全力で進んできた結果なのかな、などと振り返っています。

感染症情報

4月後半から**感染性胃腸炎**の発生数が一挙に増え、流行が拡大しました。ノロウイルスとロタウイルスの両方が関係しているようです。吐き気強い、水分が摂れないと脱水状態になりやすく、ぐったりしている場合は早めに受診して下さい。また日頃からのこまめな手洗いのほか、食品の衛生管理にも留意して下さい。

インフルエンザの流行は下火になりました。例年では春先にB型が流行することが多いのですが、今年はB型の発生はほとんどなく、もうすぐ終息に至るのではないかと思います。

りんご病（伝染性紅斑）の流行はまだ続いています。子どもにとっては頬や腕などが赤くなるだけの軽い感染症ですが、大人の方がかかると発熱や強い関節痛がおきます。また妊娠中の女性が罹患すると流産するおそれがあります。十分注意して下さい。残念ながらワクチンはまだありません。

溶連菌感染症や**アデノウイルス性咽頭炎**も発生しています。いずれも熱と喉の痛みが特徴です。

RSウイルス感染症、**ヒトメタニューモウイルス感染症**、**マイコプラズマ感染症**による気管支炎の発生もあります。

風疹や**麻疹**の発生は当地ではありませんが、全国的には発生があります。子どもたちは2回の予防接種（1歳と小学入学前1年間）を確実に受けて下さい。大人の方も積極的に予防することが必要です。

さて、令和がどんな時代になるのでしょうか。社会の様子も変わっていくことでしょう。それに伴い、小児医療も子育て環境も変わっていくに違いありません。

大きな道筋を見失うことなく、次の世代により良い社会を築き、残していけるよう、これからも力を尽くして行きたいと思っています。

今月の予定

院長出務

上越市休日診療所勤務 4月29日

市立たにはま保育園健診 8日

市立有田保育園健診 15日

上越市夜間診療所 15日

聖母保育園健診 22日

上越有線放送 「健康ライフ」 21日

FM上越 「Dr. ジローのこども健康相談」

毎週木曜午後1:20頃～(76.1MHz)

感染症情報（毎週）

FM上越：木曜午後1:35頃～

上越有線放送：月曜午後6時～（番組内）

子どもの病気

りんご病にご注意を

りんご病が数年ぶりに大きな流行になっていきます。園や学校で赤い顔をしているお子さんをよく見かけるのではないかと思います。

子どもにとっては通常は軽い感染症。頬が一樣に赤くなるので「りんご病」というあだ名が付いています

(顔の中心部のいわゆるTゾーンは赤くならず、耳の前にかけて赤くなるので「平手打ち様」という言い方もされます。虐待と間違われないといいたければ、他に腕や太ももも赤くなります。

こちらの様子は「レースの編み目様」とか、「やぶれレース様」という言い方をされます。当初は離れていた発赤が、次第に大きくなって周りのものと融合して一面に発赤に。そのご中心部から色が抜けていくので、そんな名前が付いています。

子どもはおおむね皮膚症状が1週間ほど続くだけで終わります。発赤のところのほてりが強く、痒みがある時には、痒み止めを使うこともあります。でも大半は無治療です。

そして、体内のウイルスがいなくなったあとに症状がでるので、りんご病だとはつきり分かった時には伝染力はありません。そのまま登園・登校が許可されます。

●ウイルスの正体

りんご病の正式名称は「伝染性紅斑」。原因は「ヒトパルボウイルスB29」というウイルスです。

実はこのウイルスは血液に悪さを与えます。日本人には少ないのですが、球状赤血球症という遺伝性の疾患があると、急激に溶血を起こし、重度の貧血をおこします。

一度感染すると終生免疫ができ、もう一度感染することはありませぬ。日本人の半数ほどは子どもの時にかかっているようです。

●大人がかかること・

大人は発赤が出現する前のウイルス血症の時に発熱、関節痛が数日おきます。けつこう強い痛みで、仕事ができないくらい。まだ発疹がでていないので、診断が難しいのですが、例えばお子さんがりんご病にか

かっているのであればそのことを医師にお伝え下さい。診断に役にたちます。数日は解熱鎮痛剤を使いながら休んでもらいます。

●妊婦がかかること・

一番の問題は妊娠中の女性が罹患すると胎児に障害がでることです。胎児水腫という状態になり、流産の原因になります。

子どものころにかかっていたら罹患する恐れはないので、心配無用。でも子どものころかかったかどうか、なかなか分かりません。親も本人も忘れていくからです。

お子さんがりんご病にかかったなら母子手帳の罹患歴の欄にその旨を記載して下さい。

「記憶よりも記録を」。きっと大人になってから役立ちますよ。

経験的漢方論 (5)

大建中湯なしでは生きていきません

そういうとオーバーに聞こえるかもしれませんが、私にとって「大建中湯（だいけんちゅうとう）」はそんな存在です。

私は生後8か月の頃、腸重積をわずらい、手術を受けています。小腸の終わりの部分が大腸の中に入り込んでいく病気。「火を付けたような泣き方」が特徴ですが、数時間から半日ほどで腸の粘膜が損傷して血便になります（イチゴゼリー状）。発症から1日以内であれば、高圧浣腸（注腸）によって内科的に治すことができるでしょう。でも2～3日目になると、この処置をすることで腸管が破裂することもあり、開腹しての手術を行うことになります。

私の場合はかかりつけの内科医（当時は小児科専門の開業医は皆無）が診断できず、3日経ってから病院へ送られたそうです。直ちに開腹手術を実施。もう少し時間が経っていたら、命を落とすことになっていたかも。

今から60年ほど前の医療事情や技術水準を考えると（もちろん小児外科はありません）、手術自体もよく行えたものだと思います。おそらく体重はまだ6～7キロ。小さな命を助けてもらいました。お陰で今の私が存在しています。

そして私の持病の話・・・腸管に癒着があります。通常は何ともないのですが便秘ぎみになると、腸管内を便が通過する時に強い腹痛を伴います。数年前、大腸内視鏡で3箇所腸管癒着が原因だと分かりました。

ここに大建中湯が登場します。通過しづらくなった腸管の血流を改善し、癒着を和らげてくれます。1週間ほど飲んだあと、腹痛で悩むことがなくなりました。大建中湯はいつも手元において、お守り代わりにしています。（続く）